日本「アジア英語」学会

ニューズレター

JAFAE NEWSLETTER No. 9 (July 2001)

第９回全国大会、東洋英和女学院大学で開催

日時: 2001年6月23日(土)
10:00〜17:45

第９回全国大会プログラム

大会総合司会　榎木薗鉄也　(秋田県立大学)
10:00　開会の辞: 竹下裕子 (東洋英和女学院大学)
会長挨拶: 本名信行　(青山学院大学)
10:10 - 11:40 特別講演: 末延岑生（神戸商科大学）
「ニホン英語３０年」
11:40 - 12:00 会員総会

(12:00 - 13:30 昼食休憩)

13:30 - 15:30 研究発表
司会: 加藤三保子（豊橋技術科学大学）
１.「ポストモダン視点からみる英語学習者のアイデンティティ形成：北米の大学で暮らす日本人学習者」
森山真吾（University of Massachusetts, Amherst）

２."A Comparative Study in English Academic Writing and Japanese Academic Writing: The Difference in the Idea of Paragraph"
加納なおみ（東京水産大学）

３.「Inner Circle諸国の公共放送局のアジア戦略－文化プロモーションの手段としての英語教育放送とその影響」
松田岳士（青山学院大学大学院）

４.「『ニホン英語』の理解度（Intelligibility）の研究」
岡田真弓、松岡昇（獨協大学）

16:00 - 17:45　シンポジウム
テーマ: ビジネスとアジア英語
司会: 竹下裕子（東洋英和女学院大学）
発題:
久保田信一（東洋英和女学院大学）
「アジアにおけるビジネスと英語－５つの視点から」
北垣日出子（日本橋学館大学）
「国際秘書学から見たアジアビジネスと英語」
室伏一郎（住友商事）
「アジアにおける英語とビジネスの最新情報」

閉会の辞: 大島真（実践女子大学）

18:00 - 懇親会

大会をふりかえって

大島　眞（実践女子大学）

日本「アジア英語」学会第９回全国大会はまことに落ち着いた緑あふれるキャンパスの東洋英和女学院大学で行われた。榎木薗鉄也氏の大会総合司会で、竹下裕子氏による開会の辞、本名信行氏の会長挨拶でスタートした。

ひき続き特別講演にうつり、「ニホン英語３０年」と題して末延岑生氏が登壇し、大変興味深いというか、面白い話をされ、なんども聴衆を爆笑のうずにまきこんだ。末延氏の話は、他人の論文・本からの借り物でなく、すべて古くは1975年、新しくは1996年のご自身による実験・考察の成果であって、体験の迫力を感じさせるものであった。いつのまにか吉本興業の末延師匠の落語を聞いているような愉快さがあった。そして、その落語の「落ち」は何であったかというと、「英語の先生は、生徒・学生に対してテンスな姿勢をとるのではない」ということであった。これは、後に続く研究発表・シンポジウムを通してのキーワード的な主張となった。

午後の研究発表では、森山真吾氏が「ポストモダ

ン視点からみる英語学習者のアイデンティティ形成－北米の大学で暮らす日本人学習者」というテーマで話され、マサチューセッツ大学アマースト校での特定言語別のイマージョン的寮生活の実態にふれられた。外国語学習には教室外の活動がいかに役立つかという観点からも興味深いものであった。

次の発表者は、加納なおみ氏で"A Comparative Study in English Academic Writing and Japanese Academic Writing : The Difference in the Idea of Paragraph" というテーマで、文レベルでなくパラグラフ・レベルで英語作文を考える意義を強調された。同感とするところ大であった。

３番目のスピーカーは、松田岳士氏で、「Inner Circle 諸国の公共放送局のアジア戦略一文化プロモーションの手段としての英語教育放送とその影響」と題し、やはりアジアの学習者の英語は卑下され、ネーティブスピーカーの英語が学習達成モデルという図式が固定してしまう危険を警告された。これも、英語教師が学習者に対して「テンス」になってしまう環境が作られてしまうのであろう。最後の研究発表者は岡田真弓氏と松岡昇氏で、「『ニホン英語』の理解度の研究」で、学習者の評価で一番きびしいのは、まさに「やっぱり」日本人英語教師であることを、明確に数字で示された。

シンポジウム・テーマは「ビジネスとアジア英語」で、竹下裕子氏が司会をされた。久保田信一氏は「アジアにおけるビジネスと英語－５つの視点から」、北垣日出子氏は「国際秘書学から見たアジアビジネスと英語」、最後に室伏一郎氏が「アジアにおける英語とビジネスの最新情報」を述べられた。このシンポジウムでも、一貫して感じられたことは、学習者が「テンス」なくして、英語を学べることの大切さであった。

特　別　講　演

『ニホン英語３０年』

竹下裕子（東洋英和女学院大学）

末延氏は、紫色のデンファンのコサージュを胸に登場した。アジア英語の学会には、アジアの花が相応しい。

幼少期から現在までの英語との関わりを語りながら、なぜ世界の中の「ニホン英語」の研究に没頭することになったのか、そして同時に「ニホン英語」がいかに大切なものであるか、巧みに聴衆に伝えた。

5歳の時、初めて覚えた「ギンミー・チューリンガン」以来、のちに「英語の先生のくせになぜそんな学問を？」と言われることになった教育学を専攻し、充実した学生時代、チョムスキーブーム真っ只中、神戸女学院と関西学院で教壇に立った青年時代、そしてチョムスキーを学ばずして英語教員にあらずと言わんばかりの風潮に逆らい、独自に確立した確固たる根拠から、愛情豊かに学生たちの「ニホン英語」を見守り、指導し、称え、励ましてきた今日に至る大学教員時代のご経験･･･私たちは笑いながら、うなずきながら、聞き入った。

ことばはその土地の特産物である、と末延氏は強調する。人は理解し合う能力を授かってこの世に生まれてくるのだから、思うとおりに話せばよい。母語を異にする者同士も例外ではない。事実、アメリカのレストランで lice と発音して rice が出てこなかった試しがない。一方、中国における英語教員時代、どうしたらあなたのようなわかりやすい英語を中国人学生に対して話すことができるのか、と問うネイティブスピーカー教員に対して、「明瞭な発音、平易なセンテンスと単語を用いよ」とのアドバイスさえ与えたではないか。

当時、県下一の才女が集まった神戸女学院では、中１の初めに現在進行形、次に命令形を教えたと言う。人間は行動する動物である。その行動を、教科書も文法もなく、自由に教えた英語教育は驚きであった。日本人学生の英語能力は決して低いものではない。ただし、その能力の引き出し方を間違ってはならない。非常に緊張した授業環境の中で、アメリカ英語の細部までを叩き込まれる子どもたちは気の毒である。おおらかで楽しい環境で、楽しく英語を教えることができれば、彼らは必ずや日本の特産物である「ニホン英語」により、世界の人々とのコミュニケーションを達成することができるはずである、と末延氏は信じている。

閉会後、末延氏は特別講演の表題を表した模造紙を大事そうに丸めて神戸まで持ち帰った。源邦彦会員の父上による見事な毛筆の書であった。そんなところにも、末延氏の温かなお人柄を見た。

トコラオーク

河原俊昭（金沢経済大学）

表題の「トコラオーク」だが、はて何だろうと不思議に思った読者もいるだろう。実は、フィリピンでは、ニワトリはトコラオークと鳴くのである。昔、あるフィリピン人と動物の鳴き声の話をしていた時、日本ではニワトリはコケコッコーと鳴くと言ったら、その人は非常に驚いたことを記憶している。そのフィリピン人は、ニワトリはどこでもトコラオークと鳴くものだと思っていたようである。もちろん、フィリピンと日本では、ニワトリの鳴き方が異なるのではなくて、そのように我々の耳が聞いてしまうのである。英語圏の人々はニワトリの鳴き声を cock-a-doodle-doo と聞こえると言うが、動物の鳴き声は言語社会ごとに異って聞こえてくるようである。

私の妻はフィリピン人である。次男を出産してから、体を休めるために、数ヶ月間子供たちを連れて

里帰りをした。妻と子供たちが日本に帰ってきて数日経ったある日、私は長男を連れて散歩していた。その時、犬が近くで吠えたら、長男は犬を指さして、アウアウと鳴き声を真似するのである。変だなと思ったが、すぐに、犬の鳴き声はアウアウと里で教わってきたらしい、と気づいた。今では、犬はワンワンと鳴くのだと日本式に覚えてしまったが、しばらくは犬のことをアウアウと呼んでいた。ところで、英語圏では、犬は bowwow と鳴くそうだが、そう言われれば、犬の吠える声など、バウアウとも、アウアウとも、ワンワンとも聞こえてくる。

フィリピンと日本では、鳴き声だけでなく、動物のイメージも異なってくる。ニワトリに関しては、同じく食用にするので、さほどイメージに相違はないが、犬になるとかなり異なってくる。日本では、ペットとして犬を飼っている家が多いが、フィリピンでは、犬を飼う目的は防犯である。日本では、ポチのように可愛い名前が付くことが多いが、フィリピンで一番多い犬の名前は *Bantay* である。その意味は「警護」である。フィリピンでは、防犯のために、大型犬が好まれる。しかし、あまり餌を与えられないので、やせこけていることが多い。飼い主が洗ったりすることも稀なので、たいてい薄汚れている。日本のように、まるまる太って、リボンをつけたオシャレで可愛い子犬を、老婦人が散歩に連れてゆくという光景は、まず見あたらない。

「小学生３年生の花子は病気のポチを大事に抱えて、犬猫病院に連れて行った」という文は、タガログ語に翻訳がむずかしい。一応訳すことはできるが、フィリピンの人には理解しがたい文になる。小学３年生が犬を運ぶことができるのか？あんな薄汚れたものをなぜ大事に抱えるのか？なぜ病院に連れてゆくのか（犬が弱ってきたら食用に解体することも多い）？と疑問を次々に発するだろう。こんな簡単な文でも、フィリピン人に理解されるようにするには、たくさんの注釈を付けなければならないのである。

英語圏では、犬が人間の生活に入り込んでいるので、dog を用いた成句が山ほどある。die like a dog, dog days, doggedly などである。日本語でも、英語ほど多くはないが、犬を用いた成句はかなりある。「犬の遠吠え」、「犬死」、「犬も歩けば棒に当たる」などである。しかし、タガログ語では、犬 *aso* を用いた成句はほとんどない。また、フィリピンの小説を読んでいると、豚、ニワトリ、水牛はよく登場するが、犬はほとんど登場しない。そんなことから、私見だが、フィリピン人の書いた小説で、犬の描写が上手だったら、その小説家は、外国生まれのフィリピン人の可能性が高いと考えている。

現在、私は、日本とフィリピンの二つの文化にどっぷりと浸かっているが、二つの文化を行き来するたびに、毎回何か発見があって面白い。妻は最近、小さな発見をした。それは、シューベルトの「アベマリア」である。この清楚なメロディーを聴くたびに、心が洗われるようなうれしさを感じる日本人が多いと思う。しかし、この曲は、フィリピンでは、葬式に流れる音楽である。妻はアベマリアを聴くたびに、死体を連想すると気持ち悪がっていたが、次第に、この曲の美しさに気づくようになってきた。最近、妻はこの曲が自分のお気に入りになったことを「発見」した。

最後に PR を一つ。来年の学会の海外研修は、私が世話人となって、フィリピンへ行く可能性が高い。その時は「フィリピン小さな発見の旅」として企画してみたい。フィリピンでは、ニワトリは何と鳴くか、犬は何と吠えるか、知りたい好奇心の旺盛な方の参加をお待ちしている。

新　刊　案　内

『英訳　ジュニア川柳　Through Youthful Eyes － Japanese Children's Senryu Poems in English Translation』
撫尾清明訳　　アラン・クロケット監修
2001 年 4 月刊　　1200 円（送料別）
ご注文は、直接、撫尾（うつお）会員まで
Tel & Fax: 0952-23-6917
E-mail: seimei@d7.dion.ne.jp

『アジアにおける日本語教育』
本名信行・岡本佐智子編
三修社　2000 年 5 月刊　　3000 円

『応用社会言語学を学ぶ人のために』
ダニエル・ロング、宮治弘明、中井精一編
世界思想社（近刊）価格未定
（編者のダニエル・ロング氏は本学会会員。本学会理事の大原始子も共著者の一人）

新　刊　書　評

『「正しさ」への問い　批判的社会言語学の試み』

野呂香代子、山下仁編著 東京：三元社 2800 円

大原始子（桃山学院大学）

ことばを Standard と Non-Standard というパラダイムで捉えて、考えを進めていくことが多い。それは、本来、理論的説明を行う上で必要な用語であったはずだが、どこかに「正しい/正しくない」、「良い/悪い」という判断を加えてしまっていないだろうか。本書は、われわれが無意識のうちに受容している価値基準、規範を今一度疑ってみることから、ことばと社会の関わりを見ていこうというものである。

編著者の野呂は、談話分析を専門とし、平塚らいてう『元祖、女性は太陽であった』の独訳（大月書

店）があり、山下は、ウルリヒ・アモンの邦訳『言語とその地位』（三元社）で知られる。内容は、第１章クリティカル・ディスコース・アナリシス（野呂）、第２章敬語研究のイデオロギー批判（山下）、第３章ネイティブ・スピーカー再考など、全７章で構成されている。

本書の根幹となる第１章で、野呂は、統語論の講義で「太郎が花子をなぐった」の例文に、ある種の「不快感」を覚えた経験を語っている。ここで、問題となるのは、統語構造そのものであることは百も承知なのだが、この例文に潜む不快感のはけ口が見つからなかったのである。彼女は、「太郎」「花子」という語彙ではなく、語彙や統語をもって示される潜在的な世界観を問題視したのである。決してヒステリックにではなく、非常に繊細な感覚で、ことばに接し、どのような方法で学問的に提示していくか真摯に探る姿を見ることができる。その学問的手法として、談話分析の一派であるクリティカル・ディスコース・アナリシス（Critical Discourse Analysis, CDA）が、本章で丁寧に紹介されている。本書のサブタイトルにある「批判的社会言語学」は、ここから来たのであるが、Critical の和訳が「批判的」しかないので、誤解を防ぐために付け加えておくと、社会言語学を批判するという意味ではない。日常のことば、社会、個人を、まさに「クリティカルな」（社会的センスをもって問題意識を投げかける）視点で解釈していこうという一つの研究の流れなのである。

語る側に無意識の規範があり、その無意識を許容する土壌がある。聞き手側には、苛立ちを覚える人もあれば、何も感じない人もいる。日本でアジア英語研究を進めようという時、われわれは、語り手、聞き手どちらの立場であっても、言葉に対して常に鋭敏で、論理的に説明できる準備が必要であろう。青臭い本だと野呂は言うが、ハッとさせられる好著である。

インド英語サイト情報

1) Central Institute of English and Foreign Languages, Hyderabad, India
インドの英語と外国語の代表的な研究機関のサイト。
http://www.ciefl.org/

2) Yahoo India
インド情報満載のサーチエンジン。
http://in.yahoo.com/

3) Yahoo News India
インド関連ニュースが満載のサイト。色々なソースのニュースを見ることができる。
http://in.news.yahoo.com/

4) Doordarshan 2001
インドの国営放送。英語やヒンディー語のニュースや音楽のライブの映像が楽しめる。
http://www.ddindia.net/

編集委員会から

①紀要原稿の募集

本学会紀要、『アジア英語研究』第4号の原稿を募集しています。研究論文、調査報告、書評、エッセイ等、奮ってご応募下さい。締め切りは2001年11月30日です。応募の節は、『アジア英語研究』第3号の巻末にあります投稿規定に従って原稿を作成し、学会事務局まで郵送下さい。多くの会員の方々からのご投稿を期待しております。

②モノグラフの販売

モノグラフを販売しております。第1号は、ただいま増刷中ですが、一部500円、第2号は一部600円です（郵送費は購買者負担）。両号とも大変充実した内容であることは勿論ですが、売上の50%は学会の純益となり、学会運営に貢献致しますので是非多数の方の購買をお願い致します。また、会員以外の方にも購買を呼びかけていただければ幸甚です。よろしくお願い致します。

ブラジ・カチュル教授＆ヤムナ・カチュル教授公開講演会

カチュル教授ご夫妻はインドのご出身でアメリカで長く教えられ、現在、ともにイリノイ大学名誉教授です。お二人は世界諸英語（World Englishes）の考え方の発展と普及に尽力されました。

ブラジ・カチュル教授は IAWE（International Association of World Englishes）創設者で、*World Englishes* 誌の創刊・編集者です。編著書には *The Other Tongue*（1996）Oxford University Press や *Indianization of English*（1983）Oxford University Press などがあります。

①日時：2001 年 9 月 29 日（土）13:30～15:30
場所：青山学院大学青山キャンパス 921 教室
演題：Prof. Braj Kachru, “World Englishes in the Classroom”
Prof. Yamuna Kachru, “World Englishes and Intercultural Rhetoric”
使用言語：英語（通訳なし）　参加費：無料
主催：青山学院大学英文学会・同国際コミュニケーション学会（03-3409-8111）

②日時：2001 年 10 月 1 日（月）　16:00～18:00
場所：早稲田大学西早稲田キャンパス教育学部大会議室（16 号館２階）
演題：Prof. Braj Kachru, "World Englishes Today"
Prof. Yamuna Kachru, "Speech Acts in World

Englishes"
使用言語：英語（通訳なし）　参加費：無料
主催：早稲田大学教育学部矢野安剛研究室

メーリングリストのお知らせ

このたび、宮崎産業経営大学の徳地慎二会員にご協力をいただき、メーリングリスト（以下、ML）を始めることにいたしました。しばらくの間、民間の無料MLを利用した「試行」とし、加入者は本学会会員のみとします。

MLの名称（アドレス）は次の通りです。加入希望者は下の加入方法に従ってお申し込みください。

asianenglishes@ml.melma.com

管理および窓口は榎木薗理事、運営および管理の作業は徳地会員がいたします。

＜加入方法＞
加入希望者は、氏名、メールアドレス、所属を電子メールで榎木薗理事と徳地会員まで送ってください。加入は本学会会員に限ります。
＜脱会方法＞
脱会希望者は氏名、メールアドレスを電子メールで榎木薗理事および徳地会員に送って下さい。
＜管理者のメールアドレス＞
榎木薗鉄也理事：enokizono@akita-pu.ac.jp
徳地慎二会員：steve@hkg.odn.ne.jp

会　計　か　ら

日本「アジア英語」学会 2000 年度収支決算書

単位:円

収入の部			
費　目	清算額	予算額	増　減
年会費	470,000	500,000	△ 30,000
(正会員 144 名)	(432,000)		
(学生会員 19 名)	(38,000)		
全国大会	490,500	600,000	△ 109,500
(第 7 回)	(265,500)		
(第 8 回)	(225,000)		
繰越金	409,983	409,983	0
00 年度収入合計	1,370,483	1,509,983	△139,500

支出の部			
費　目	清算額	予算額	増減
通信費	157,430	150,000	△ 7,430
NL 印刷費	48,840	110,000	61,160
紀要制作費	298,980	300,000	1,020
文房具	27,772	30,000	2,228
全国大会	321,618	650,000	328,382
(第 7 回)	(237,618)		
(第 8 回)	(84,000)		
人件費	23,000	30,000	7,000
Internet 接続料	23,310	23,310	0
寄付金	3,070	0	△ 3,070
雑費	5,020	0	△ 5,020
00 年度支出合計	909,040	1,293,310	384,270
00 年度収支差額	461,443	216,673	244,770

日本「アジア英語」学会 2001 年度予算書

単位:円

収入の部			
費　目	2001 年度予算額	00 年度予算額	増　減
年会費	1,120,000	500,000	620,000
(正会員 200 名)	(1,000,000)		
(学生会員 30 名)	(90,000)		
(法人会員 1 社)	(30,000)		
全国大会	500,000	600,000	△ 100,00
モノグラフ売上	60,000	0	60,000
繰越金	461,443	409,983	51,460
合　計	2,141,443	1,509,983	631,460

支出の部				
費　目	01 年度予算額	00 年度決算額	00 年度予算額	増減(予算)
通信費	200,000	157,430	150,000	50,000
NL 印刷費	100,000	48,840	110,000	△ 10,000
紀要制作費	350,000	298,980	300,000	50,000
文房具	30,000	27,772	30,000	0
全国大会	500,000	321,618	650,000	△ 150,000
人件費	60,000	23,000	30,000	30,000
ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ接続料	23,310	23,310	23,310	0
雑費	30,000	5,020	0	30,000
合　計	1,293,310	905,970	1,293,310	0

事　務　局　か　ら

1. 会則の変更

会則が以下のように変更になりました。（6月23日の第9回全国大会時の会員総会で承認。）

第4条（会員）
本会の会員は、正会員、学生会員、法人会員、<u>海外会員、名誉会員</u>とする。（下線部変更部分）

海外会員とは、会員の推薦によって理事会で承認された者に限る。年会費は無料とし、大会で発表したい場合は大会参加費を支払ってもらうこととする。インドやパキスタン、中国などのアジア諸国で是非入会したいが経済的に年会費を納めることが困難な者を対象とする。会員サービスとしてのニューズレターや紀要の配布、紀要の投稿は許可する。もしも転勤などで会費が支払える状態になった時は速やかに事務局に連絡してもらい、正会員なり学生会員への変更をお願いする。

名誉会員は、会員の推挙で理事会で承認された者に限る。年会費は無料で、この資格は国内外を問わない。

なお、海外会員と名誉会員は選挙権ならびに被選挙権はない。

2. モノグラフ第2号の発刊

モノグラフ第2号が発刊されました。定価は600円で、事務局で購入可能です。詳しくは別項を参照

してください。

3. 第 10 回全国大会について

第 10 回全国大会は 12 月 1 日（土）に金沢経済大学（石川県金沢市）にて開催いたします。フィリピン英語の権威であるデ・ラ・サール 大学のバウティスタ博士（Professor Maria Lourdes Bautista, De LaSalle University）が特別講演をされます。大会テーマは「開発援助とアジア英語」です。研究発表の応募に関しては別項を参照してください。大会や金沢経済大学については次の URL をご参照下さい。
http://www.kiwinet.kanazawa-eco.ac.jp/kawahara/AsiaConvention/index.htm

4. 2002 年度海外研修

海外研修に関しては、来夏にフィリピンを訪問することを検討しています。

第10回全国大会研究発表者募集

第10回全国大会（2001年12月1日（土）、於金沢市の金沢経済大学）で研究発表を希望される方（会員に限る）は、要旨（日・英どちらか）をＡ４用紙１枚にまとめて、10月５日（金）必着で、電子メール、ＦＡＸまたは郵送にて、事務局（奥付参照）までお送り下さい。

CALL FOR PAPERS for the 10th National Conference on December 1, 2001 at Kanazawa University of Economics in Kanazawa, Ishikawa

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is by e-mail, fax or mail. Abstracts for papers should be no more than 250 words in length. The deadline is Friday, October 5, 2001. Please send it to the JAFAE Secretariat (address below).

他学会からのお知らせ

TEFLIN 49th International Conference

Dates: 6-8 November 2001
Place: Sahid International Hotel, Kuta Beach, Bali,
The main theme: "ENGLISH: A PREREQUISITE FOR GLOBAL COMMUNICATION"
The topic areas include: Translation, Technology in ELT, Assessing Communication, New Approaches in ELT, Teching Literature and Communication and the Mass Media
For further information, contact the Organizing Committee Secretariat:
English Department, Faculty of Letters
Udayana University
Jl. Nias No. 13, Denpasar 80114
Bali, Indonesia
Phone/Fax: +62.361- 224121
E-mail: sastra@denpasar.wasantara.net.id

The 8th IAWE Conference

Dates: Nov 29-Dec 1, 2001
Place: Potchefstroom, South Africa
Theme: The globalisation and localisation of Englishes: partners or adversaries?
Abstracts can be submitted via e-mail or surface mail to the Programme Chair, Bertus van Rooy at (Deadline: August 31, 2001):
School of Languages,
Potchefstroom University
Potchefstroom 2520, South Africa
E-mail: nffajvr@puknet.puk.ac.za

International Conference on Learning and Teaching Language in a Multilingual Society

Dates: 24-26 September 2001
Place: Universiti Brunei Darussalam
Theme: Learning and Teaching Language in a Multilingual Society
Please direct all enquiries to: Conference Chairman "ICLTLMS",Rosnah Ramly,
The Language Centre
Universiti Brunei Darussalam
Tungku Link, Gadong BE 1410
Brunei Darussalam.
e-mail: rosramly@fass.ubd.edu.bn
fax: 00673-2-790472

＜編集後記＞

小泉内閣のメールマガジンに影響されたわけではありませんが、会員の情報交換の場としてメーリングリストをつくりました。インターネット時代は「情報の共有」の時代であります。ぜひ、ご加入いただき、積極的に利用してください。

ニューズレターへの投稿を歓迎いたします。エッセイ、情報、書評などをどしどしお寄せ下さい。

2001 年 7 月 31 日発行
編集・発行　日本「アジア英語」学会
代　表　者　本名信行
編　集　長　榎木薗鉄也
発　　行　（有）タナカ企画
事　務　局　〒182-8525　東京都調布市緑ヶ丘１－25
白百合女子大学　田嶋宏子研究室内
FAX: 03-3326-4550　E-mail: tina2@gol.com
*学会ホームページ：*http://www1.linkclub.or.jp/~jafae
年会費振込先：郵便振替　００２８０－８－３２３９
<< JAFAE Secretariat >>
Professor Hiroko Tina Tajima
Department of English, Shirayuri College
1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525 JAPAN
FAX: 03-3326-4550　E-mail: tina2@gol.com
JAFAE's homepage: http://www1.linkclub.or.jp/~jafae
JAFAE's postal transfer account number:
００２８０－８－３２３９